

現代ロシア語における不定人称文について

佐 藤 昭 裕

1. は じ め に

現代ロシア語におけるいわゆる不定人称文⁽¹⁾について、意味論・文体論の二面から若干の考察を行いたい。資料としてはチェーホフ後期の散文作品を用いた。⁽²⁾

アカデミー文法のこの構文に関する項の冒頭には次の記述がある。「主たる成分が、三人称複数現在時称、未来時称の形を持つ動詞、乃至は直説法複数過去時称の形式によって表わされ、かつ不定の個人によって遂行されつつある行為を表示する⁽³⁾ 一肢文を、不定人称文と呼ぶ。」/т. 2., ч. 2., стр. 5./ この記述、特に下線部は、一応この構文に対する一般的説明を目指しているものと思われる。しかしここで不満なのは、この一般的説明の枠内に入り切らない諸例、即ち、動詞複数形が単数不定の行為主体に対応している場合、一人の特定の具体的個人による行為が表示されている場合、話者自身によって遂行されつつある行為が表示されている場合等⁽⁴⁾ と、この一般的説明との関係が明確に示されていないという点である。この結果、上述の記述も単なる一般的説明といった曖昧な性格のものに留まり、この構文の本質をついた記述となり得てはいない。結局アカデミー文法は用例の分類、整理に終わっているように見える。

グヴォズデフは次のように言う。「不定人称文の特性は、定人称文と比較すれば、すべての注意が事実、事件、行為に集中するが、行為主体は隠されたままである……という点にある。」/стр. 306./ この発言はこの構文の本質的機能の探求を目指したものであると思われる。

ババイツェヴァも同様に、「話者および聞き手の注意が行為に集中し、行為者は隠されたままである」/стр. 34./ という。しかし彼女は実際の用例の分類に際し、一項を設け、「行為者は恐らく話者にも知られているが、種々の理由によりこれを明示しない。不定性が生ずるのはこの故である」/стр. 35./ といい “—Может быть, меня *покармят* обедом? —дрожа губами, сказал Степанов./Ю. Герман, Я отвечаю за все/, ” という例について、「勿論話者は誰が食事を出してくれるのか知っている。Степанов は家に帰って来たのだ

から。しかし彼は忌々しさを表現する為、故意にこの人物を明示しないのである」/срр. 35./ という。この例なども、彼女が最初に設けた枠の中に完全に納まるとは言い難い。もし行為主体に対して話者が全く無関心であれば、行為主体の表示を故意に排除することによって特定の効果を期待することは不可能になるからである。対象を故意に排除することは、まさにその対象に注意を向けて、始めて可能になるのだから。

従って、《行為に対する話者の注意の集中》にこの構文の本質を見ようとする立場にも、また、一般的規定と個々の実例との間のずれが存在することになる。

従来の研究に物足りなさを感じるのも、この点に関してである。以下の考察は主としてこの点に向けられている。

2. 不定人称文の使用における問題点

実際の使用についてみれば、次のような諸点が問題になる。

- 1) 一部の主語省略文と不定人称文の形態的一致。その結果生ずる両者の混同。
- 2) 幾つかの構文との同義性。
 - a. 不定人称文と被動相構文。
 - b. 不定人称文と、不定、或いは不明の意味を持つ語彙を主語とする定人称文。
 - c. 不定人称文と行為主体を明示した定人称文。
- 3) 《行為主体は人間である》という制限の存在。

以上の点はこれまでも指摘されてきたが、従来はこれらをそれぞれ別個の問題として捉え、これらを全体的連関の内に考察しようとする態度を欠いていた。この結果従来の研究はこれらの問題の指摘に留まり、これらの問題を通じてこの構文の本質にせまろうとするものではなかった。

3. 一部の主語省略文と不定人称文の形態的一致

現在・未来三人称複数形、過去複数形の動詞を述語とする主語省略文と不定人称文は形態的に一致する。

1. В большом доме напротив, у инженера Должикова *играли* на рояле. /Моя жизнь.
2. Зачем *обещали* и зачем *возбудили* во мне сумасшедшие надежды?/Рассказ неизвестного человека.

不定人称文である例文1と主語《вы》が省略された例文2の述語動詞は同じ語尾を持ち、二つの文の構文としての区別は、形態による保障を受けていない。勿論これらの文は文脈から、それぞれ不定人称文、主語省略文と判定され、両者が形態的に一致していても何ら問題は生じない。しかし、或る文を不定人称文とみるか主語省略文と解するかが、文脈の助けを得てもなお困難である場合も存在する。次にその例を挙げる。

3. Из другой комнаты ее тихая, ровная речь слышалась так: «Ох-тех-те». Она стала шептаться со стариком и с Аксиньей, и их лица тоже приняли лукавое и таинственное выражение, как у заговорщиков.

Решили женить Анисима./В овраге.

4. Глядя на его бледное, возбужденное, доброе лицо, Самойленко вспомнил мнение фон Корена, что таких уничтожать нужно, и Лаевский показался ему слабым, беззащитным ребенком, которого всякий может обидеть и уничтожить.

—А ты, когда поедешь, с матерью помирись,—сказал он.—Нехорошо.

—Да, да непременно.

Помолчали немного./Дуэль

これらは、文脈から行為主体を引き出せるという、共通の特徴を持っている。

ボルコフスキーもこの判定の難しさについて、「……若干の場合、或る文を不定人称文に帰属せしめるか、或いは省略された主語を持つ不完全文に帰属せしめるかの決定が困難になる」/стр. 78./ と述べている。⁽⁵⁾

事実ババイツェヴァは或る文の判定に関して、彼女がユージン(А. А. Юдин)と意見を異にしていると述べている。⁽⁶⁾

従って、主語省略文の一部は不定人称文と形態的に一致し、たとえ文脈の助けを借りても、両者の判別が困難な場合が存在することになる。

4. 幾つかの構文との同義性

4-1. 不定人称文と被動相構文

他動詞を述語とする不定人称文と被動相構文の同義性について、ヴィノグラードフは、「このような不定人称的使用において、他動詞の三人称複数形は、被動形動詞を伴う定人称構文の統辞論的シノニムとなる」/стр. 366./ と述べ、《поле вспахали》, 《поле вспахано》という対応する例を挙げている。⁽⁷⁾

ここで、二つの構文の同義的使用が文脈の存在を前提としていることに注意

したい。文脈を必要とするのは不定人称文である。《поле вспахали》が《поле вспахано》のシノニムとして使用されるのは、文脈から《мы》, 《вы》, 《они》或いは《крестьяне》, 《колхозники》のような主語を引き出せない場合に限られる。主語が引き出せる場合には、前章で見たように、主語省略文か不定人称文かという分類上の問題が生ずることになる。

4-2. 不定人称文と不定、或いは不明の意味を持つ語彙を主語とする定人称文

ババイツェヴァは次のように言う。「この外、行為者の不定性は語彙的にも表現され得る。例えば, люди, человек, многие, некоторые 等, 具体的行為者に対する指示を含まない語彙的意義を持つ語によってである。」/стр. 40./ 更に彼女は, «некто, кто-нибудь, кто-либо» その他の不定代名詞は, 行為者の不定性を語彙的に表現する働きを持つ」/стр. 41./ とし, これらの代名詞について, «これらは文法的主語としての機能を果たす」/стр. 42./ という。従って次の二つの文の違いは, 文法的主語としての《кто-то》の有無にあることになる。

5. Запели настраиваемые скрипки и флейта, стало вдруг страшно, казалось, что из всех лож *смотрят*. /Дама с собачкой.
6. Но, казалось им, *кто-то* смотрит с высоты неба, из синевы, оттуда, где звезды, видит все, что происходит в Уклееве, сторожит. /В овраге.

しかし両者の違いはそれだけではない。例文 6 における《кто-то》は, 単に文法的主語としての機能を果たすだけでなく, 《смотрит》なる行為の主体が《誰か或る人物として存在するが, 正体は不明である》ということを積極的に表現する機能を持っている。一方, 例文 5 の不定人称文は単独でこのような情報を伝えることはできない。文脈を排除すれば, この文から, 《смотрят》なる行為の主体が不明であるのか否か, 不明ではないが故意に曖昧に表現されているのか否か, という情報は得られなくなる。この種の情報を伝えるのは, 不定人称文自身ではなく, 周囲の文脈である。この構文に要求されているのは, このような情報そのものの伝達ではなく, 文脈によって与えられるこのような情報を否定しないということである。

例えば《кто-то》を主語に持つ文と同義的に使用されている不定人称文には, 《行為主体が不明であると主張する》ことではなく, 《行為主体が不明であることを否定しない》ことが要求されているのである。この結果, 不定人称文

の示す情報は、《кто-то》を主語とする文の示す情報と同一ではないが、これに対して矛盾を示すこともなくなる。不定人称文が《кто-то》を主語とする文と同義的に使用され得るのはこの故である。二つの構文は、同義なのではなく、あくまでも、同義的に使用されているにすぎないのである。

4-3. 不定人称文と行為主体を明示した定人称文

この同義性について、グヴォズデフは次のようにいう。「不定人称文は、話者にとって既知の個人による行為を表示している場合、非常にしばしば、同義的な定人称文を所有し得る。既に述べたように、これらの不定人称文の特性は、話者の注意が行為、事実、事件に完全に集中しているという点にあり、誰が行為の遂行者であるのかは、多くはこれが会話の参加者にとって全く明らかであることにより、表示されないままに終る。次のような日常的言い廻しを比べてみよう。Газеты *принесли*?, Почтальон *принес* газеты? /стр. 307./

ここでも、《Газеты *принесли*?》と《Почтальон *принес* газеты?》を、その使用されている状況から切り離せば、両者が同義であるとの認定は困難になる。4-2. に見たのと同様、二つの構文は文脈、或いは特定の状況中において、始めて同義的構文として使用され得るのである。従ってこの場合も、不定人称文の示す情報が行為主体を明示した定人称文の示す情報に対して矛盾しないことが必要となる。従って、《行為主体が特定の、話者にとって既知の、人物であることを否定しない》⁸⁾ ことが、不定人称文に要求されていることになる。

4-4. 不定人称文の示す情報

4-2., 4-3. における考察により、《行為主体が不明であることを否定しない》こと、また《行為主体が特定の、話者にとって既知の、人物であることを否定しない》ことが、不定人称文に要求されていると判明した。不定人称文が上記の構文のいずれと同義的に使用されるかは、使用時の文脈による。不定人称文そのものは、本来どちらの構文に対しても同義的に使用され得るものである。従って不定人称文はこれら二つの条件を同時に満足しなければならない。即ち、《行為主体が不明であることを否定せず、かつ行為主体が特定の、話者にとって既知の、人物であることを否定しない》ことが、不定人称文に要求されるのである。

《行為主体が不明である》ことを肯定すれば、《行為主体が特定の、話者にとって既知の、人物である》ことを否定することになる。また、《行為主体が特定の、話者にとって既知の、人物である》ことを肯定すれば、《行為主体が不明である》ことを否定することになる。従って、不定人称文とは《行為主体

が不明であることを肯定も否定もせず、かつ行為主体が特定の、話者にとって既知の、人物であることを肯定も否定もしない》文である、ということになる。

更に、《кто-нибудь》、《кто-либо》を主語とする定人称文との同義的使用から、不定人称文は《行為主体が不定であることを肯定も否定もしない》文となる。またこの構文においては、行為主体の具体的表示も勿論欠けている。以上の点を総合すれば、《不定人称文においては行為主体に関する一切の情報が欠除している》、という結論が得られる。

この結果不定人称文の示す情報は行為主体に関する限り、被動相構文、行為主体を明示した定人称文、《кто-то》等を主語とする定人称文のいずれが示す情報に対しても矛盾しないことになる。不定人称文が、これら互いに同義とはなり得ない構文のいずれに対しても同義的に使用され得るのは、この故である。

3. において見た、不定人称文が形態による保障を受けず、時として一部の主語省略文との判別が困難になるという事実も、このことにより、よく説明される。この構文が行為主体に関する一切の情報を欠き、従って《行為主体の不定性を伝達する》という特別な機能を持ち得ない以上、主語省略文との混同が避けられるべき合理的理由も、また存在し得ないからである。

5. 《推定される行為主体は人間である》という制限の存在

不定人称文においては行為主体は表示されない。従って、行為主体については推定するより外はない。

行為主体が誰であるか具体的に推定できる場合には、それが人間であることも同時に確められる。また、特定の個人を行為者として名指すことができないにしても、それが誰か人間であると容易に推定し得る場合も多い。

7. Дашутку тоже арестовали, повели в город и посадили в острог. /Убийство.

例文7における行為主体は警察、司法という機関、権力であると言えるかもしれない。しかし、行為主体はあくまでも個々の人物、警察官や憲兵であり、機関や権力ではないと主張することもできる。このような選択が問題になる例も少なくない。しかしここで上述の制限の存在を認めれば、これらの文も《行為主体はあくまでも個々の人物である》と主張するものとして認められるだろう。

8. Наконец, щенок утомился и охрип; видя, что его не боятся и даже не обращают на него внимания, он стал несмело, то приседая,

то подскакивая, подходить к волчатам. /Белолобый.

9. Прежде чем мне дали дорогу, я ходил машинистом, работал в Бельгии как простой смазчик-с. /Моя жизнь.

上の例のように、人間以外の活動体が行為者として擬人的に表現される場合、絶対的存在を認め、これを絶対者として人格的に表現する場合等も、少数ではあるが認められる。これらも上述の枠内に納めることができる。

以上の考察から、この《行為主体は人間である》という制限が、極めて強力な条件としてこの構文全体に働いていることが判る。

この制限の存在については従来余り注意が払われず、自明のこととして扱われて来たようである。

次に、この制限の存在がこの構文の本質に対して如何なる意味を持っているのか、考えてみたい。この制限の有無により、不定人称文と無人称文の違いが説明される。

ペシコフスキーは、「ここで論じられる文⁽⁹⁾は、定人称文と無人称文のいわば中間に位置する」/стр. 427./ と述べ、不定人称文と無人称文の違いについては、「《светает》或いは《вечереет》といったタイプの文において三人称単数という形態がその直接の意義を失ってしまったのに対し、これらの文⁽⁹⁾においては動詞の人称と数はその通常の意味のすべてを維持している」/стр. 428./ という。

10. Тебе говорят! /=я говорю тебе/⁽¹⁰⁾

しかし、無人称文《светает》と、話者が行為主体を兼ねる例文10のようなタイプの不定人称文の違いは、彼の説によっては説明されない。同様に、《светает》と行為主体が一人の個人でなければならない不定人称文の違いも、彼の説によっては説明されない。

これらの違いを説明するのは《行為主体は人間である》という制限の有無である。不定人称文がこの制限を持つのにに対し、無人称文はこの制限を持たない。

この制限はクラスとしての不定人称文に関わり、このクラスに属するそれぞれの文に行為主体の入るべき枠を供給するという役目を果たしている。この枠の内部は空であるが、この枠の存在により、不定人称文における述語動詞が通常の、定人称文における述語動詞と全く同様の行為を表わすことが保障される。即ちこの枠の存在により、通常の定人称文において主語と述語動詞の間に認められる論理的関係が、述語動詞のみからなる不定人称文においても同様に存在することが、保障されるのである。

6. 不定人称文の一般的意味

4., 5. の考察をまとめれば、不定人称文とは《人間の行為を表わすが、行為主体に関しては、それが人間であるということ以外、一切の情報を欠く》文であるということになる。この結果不定人称文は、述語動詞の人称、数とは無関係に、人間によって行われた行為であれば、一人の人間によるものであれ、話者自身によるものであれ、如何なる行為をも自由に表現できることになる。

不定人称文と定人称文、主語省略文、無人称文との違いは次のように説明される。不定人称文は、行為主体に関する情報を欠くという点で、行為主体を明示した定人称文、それから派生した主語省略文、また《кто-то》等を主語とし行為主体が不定、或いは不明であると主張する定人称文から区別される。また不定人称文は、人間の行為を表わすという点で無人称文から区別される。⁽¹¹⁾

7. 不定人称文の文体論的特徴

従来多くの研究において、この構文の用法が話者と行為主体の関係、即ち話者が行為主体を確認しているのか否か、表現せずにおきたいと願っているのか否かといった点を基準に分類されてきたという事実は興味深い。文体の選択の基盤にあるのは話者による事件の捉え方、即ち話者と事件の関係であるが、ここで行為主体とは事件を構成する主要な要素であり、不定人称文の用法の研究は、とりもなおさず、文体論の問題となるからである。ここでは不定人称文と、先に挙げた同義構文のひとつである被動相構文との対比を通じて、若干の考察を行いたい。⁽¹²⁾

11. Преосвященному медленно, вяло вспоминалась семинария, академия. Года три он был учителем греческого языка в семинарии, без очков уже не мог смотреть в книгу, потом постригся в монахи, его сделали инспектором. Потом защищал диссертацию. Когда ему было тридцать два года, его сделали ректором семинарии, посветили в архимандриты, и тогда жизнь была такой легкой, приятной, казалась длинной-длинной, конца не было видно. /Архиерей.
12. Через месяц был назначен новый викарный архиерей, а о преосвященном Петре уже никто не вспоминал. А потом и совсем забыли. /Архиерей.

これらは僧正《Петр》を主人公とする小説の一節である。例文 11 は主人公の生前、同12は彼の死後の叙述である。ここで下線部のような不定人称文と被

動相構文の使い分けが観察される点に注目したい。以下、不定人称文の持つ文
体論的特性を解明することにより、このような使い分けに対する説明を試みた
い。

7-1. 被動相構文における行為主体

13. —Птице *положено* не четыре крыла, а два, потому что и на двух
лететь способно: /В овраге.
14. Они гуляли и говорили о том, как странно *освещено* море; вода
была сиреневого цвета, такого мягкого и теплого, и по ней от луны
шла золотая полоса. /Дама с собачкой.

例文13で鳥に翼を与えるのは人間ではない。また、この行為者を絶対者とし
て認め、人格的に表現しているという様子もない。例文14で《照らして》いる
のは《月》である。従って、被動相構文において推定される行為主体は人間に
限らない、ということになる。

行為主体が表示される場合もある。この場合には、一般に行為主体は名詞の
造格形を用いて示される。この名詞がつねに活動体名詞であれば問題は生じな
い。しかし次に示す例におけるように、不活動体名詞が造格形で現われる場合
もしばしばある。この結果、この造格形名詞がつねに行為主体として認識され
ているのか否か、手段を表わすものとして認識されている場合もあるのか否か
は決定できなくなる。

15. Ему казалось, что он достаточно *научен горьким опытом*, чтобы
называть их как угодно, но все же без «низшей расы» он не мог бы
прожить и двух дней. /Дама с собачкой.

従って被動相構文においては、不定人称文におけるのとは異なり、論理的行
為主体の入るべき枠が用意されていないことになる。この結果、行為と行為主
体の間にあるべき論理的関係が欠除する場合も、当然起こり得ることになる。

7-2. 発話と事件の距離

文脈に対する依存度の違いから発話と事件の間の距離を知ることができる。
不定人称文は文脈中であって始めて不定人称文であると確認され、機能する構
文である。従ってこの構文を用いた発話は文脈によって与えられた特定の状況、
展開しつつある事件の流れに密着し、そこから切り離すことのできない表現と
なる。一方の被動相構文は文脈を排除してもなおその機能を果たすことができ
る。それ故この構文を用いた発話は特定の文脈、状況から独立し、事件との間
に或る距離を保つことになる。

このことは別の観点からも論じられる。伝達されるべき現実の事件においては行為と行為主体を切り離すことはできない。これらは互いに不可分であり、いずれが一方のみが他から独立して存在することはあり得ない。事件をこれらの成分に分析するのは、言語的表現に際してこの分析が必要だからである。現実の事件を考えるにあたっては、更に第三の要素、即ちこれら成分と成分の間の関係を無視することはできない。

不定人称文は行為と行為主体の間の論理的関係の存在を主張し、この現実を可能な限り忠実に再現する表現となる。従って発話と事件は接近することになる。一方被動相構文は行為と行為主体の間の論理的関係については言及せず、事件を客観的に二つの成分に分析して見せるだけである。従って発話と事件の距離は増大することになる。

7-3. 発話と事件、話者と事件の距離

発話と事件の距離の二つの構文の間における違いを実際に観察してみたい。

再び例文11, 同12に戻ることにする。例文11は死を前にした主人公が、これまで自分の歩んで来た人生を回想する場面の叙述である。同12は主人公の死後の事件の叙述である。ここで二つの構文の使い分けを観察すれば、主人公《Петр》に関する事件の叙述には不定人称文が使用され、彼の死後新たに任命された代理僧正に関する叙述には被動相構文が使用されていることが判る。

また、作者と登場人物の関係を問題にすれば、作者と主人公、作者と脇役の距離の間には当然違いのあることが予想される。即ち前者は小さく、後者は小さくとも前者より大きくなければならない。

従って作者と主人公の距離の小さいことが不定人称文の使用に対応し、作者と脇役の距離の大きいことが被動相構文の使用に対応することになる。ここで作者とは話者であり、登場人物とは事件の主要部分である。それ故話者と事件の距離の大小が、7-2.に見た発話と事件の距離の二つの構文の間における違いに対応していることになる。

例文11では読者の意識、注意は主人公の老僧正に集中し、彼が思い起こす人生の歩みの一步一步を、読者も彼の立場に立ち、彼が抱くのと同じ感興をこめて眺めざるを得なくなる。同12では《был назначен новый викарный архиерей》により、読者の意識は僧正の立場から離れ、読者は客観的位置から事件を眺めることになる。しかし次の、《А потом и совсем забыли》によって、読者の意識は再び主人公に集中し、読者は彼の死という厳粛な事実を深く認識せざるを得なくなるのである。

この発話と事件の距離の大小により、二つの構文の間には主観的表現、客観的表現という違いが生じる。不定人称文の使用に際し、話者の意識は叙述の中心話題に接近し、主人公の立場に同化することがある。この結果、この構文は主観的、また情動的表現となる。一方被動相構文の使用に際しては、話者は或る距離をおいて事件を眺めることになり、この構文は客観的、また静的な表現となる。

7-4. 幾つかの具体例

以下若干の具体例を挙げて、この小論を終えることにする。

16. В настоящее время крыша на лавке и дверь выкрашены и блестят, как новые, на окнах попрежнему цветет веселенькая герань, и то, что происходило три года назад в доме и во дворе Цыбукина, уже почти *забыто*. /В овраге.

例文16では同12と同じ動詞《забыть》が使われているが、被動相構文の使用により、中心的事件が落着し過去の出来事になってしまったという印象が与えられ、一種の静けさが感じとられる。

17. И казалось, что еще немного — и решение *будет найдено*, и тогда начнется новая, прекрасная жизнь; и обоим было ясно, что до конца еще далеко-далеко и что самое сложное и трудное только еще начинается. /Дама с собачкой.
18. Он был вдов, но через год после свадьбы сына не выдержал и сам женился. Ему *нашли* за тридцать верст от Уклеева девушку Варвару Николаевну из хорошего семейства, уже пожилую, но красивую, видную. /В овраге.

上の例を比べてみる。例文17における被動相構文の使用は、自分の努力では事態を解決できない主人公の、解決策が自ずと見つかることを期待せざるを得ない気持に対応している。例文18における不定人称文の使用は、《Варвара》が忽然と現われて《彼》の嫁となったのではなく、皆が方々を探し回った結果やっとのことで適当な娘として選出されたのが彼女である、という現実に対応している。

19. —Какой это мерзавец и каналья осмелился привязать лошадь к яблоне! Боже мой, боже мой! *Перепортили, перемерзили, пересквернили, перепакостили!* Пропал сад! Погиб сад! Боже мой! /Черный монах.

これは不定人称文が情動的表現として使用されている例である。ここでは、被害を蒙った話者の怒りと興奮が不定人称文の使用によって示されている。

注(1) неопределенно-личное предложение.

- (2) テキストは А.П.Чехов. Собр. соч. в 12. т., т. 6., т. 7., т. 8., М., 1955～1956. を用いた。
- (3) 下線は筆者による。以下同様。
- (4) Академія文法 т. 2., ч. 2., стр. 6～7. 参照。
- (5) この著は現代ロシア語を記述の対象としたものではないが、この部分の記述は現代語をも対象に含めているものと思われる。
- (6) Бабайцева, стр. 38. 参照。
- (7) Академія文法 т. 1. стр. 414. にも類似の指摘がある。
- (8) 不定人称文の行為主体が《人物》,《個人》であることについては 5. 参照。
- (9) 不定人称文を指す。
- (10) このタイプの不定人称文についてはアカデмія文法 т. 2., ч. 2., стр. 7. 参照。
- (11) 不定人称文と被動相構文の関係については 7. 参照。
- (12) ここで -ся 動詞を取り扱うことはできなかった。以下被動相構文とは《被動形動詞を用いた定人称文》を指す。

Литература.

АН СССР, Институт русского языка, Грамматика русского языка, М., 1960.

В.В.Бабайцева, Односоставные предложения в современном русском языке, М., 1968.

В.И.Борковский, Сравнительноисторический синтаксис восточнославянских языков. Типы простого предложения, АН СССР, Институт русского языка, М., 1968.

В.В.Виноградов, Русский язык (грамматическое учение о слове), изд. 2., М., 1972.

А.Н.Гвоздев, Очерки по стилистике русского языка, изд. 2., М., 1955.

А.М.Пешковский, Русский синтаксис в научном освещении, изд. 3., М., 1928.